

多価的素性でみたスペイン語の音韻プロセス

出口 厚 実

1 超分節要素に関するものを除いて、一般に生成音韻論で用いられる音韻素性は二価的 (binary) である。この点ではその前駆である音素の弁別的特徴に見られる2対立原理の伝統を受け継いでいると言える。Postal (1968), Chomsky & Halle (1968) は音声細部規則 (Phonetic Detail Rule) の出力における素性の多価性 (multi-valued) を認めているものの、組織的音声レベルと組織的音素レベルを繋ぐ規則や後者内の現象は2元的対立の素性で規定されるとしている。過去の音韻論で素性の多価性が意外に顧慮されなかったのは、二価素性と多価素性を含む理論より前者のみを利用する方が「より制限された」、従って望ましい理論であるという、単純な簡潔性優先の原則に一因がある。実際は多価的な特性に2項対立の覆面をかぶせて、3値あるいは4値を+、-に還元してしまうのはごく容易なことであったからである。

小論は、音声 segment の細別記述のみならず、組織的音声レベルと音韻レベル間の規則性や自然な音韻プロセスを適切に把握するためにも、ある種の素性は多価的であるべきことをスペイン語資料から示すのを目的としている。考察の中心になるのは、Harris (1969) 以降多くの関心が注がれている、スペイン語の擦音化 (Spirantization) である。

2 [b, d, g] vs. [β, δ, γ]

標準カステリャ方言やその他多くの方言で閉鎖音 [b, d, g] は休止後及び鼻音の直後に現われ、[d] は更に歯部側音 [ʎ] に後続する位置にも出現する。他の環境では摩擦音のシリーズ [β, δ, γ] が実現される。

(1) b, d, g (以下 St と略す)

<u>b</u> ámos	<u>d</u> ílo	<u>g</u> ráθjas
ám <u>b</u> os	á <u>ḡ</u> da	tá <u>ḡ</u> go
	ká <u>ḡ</u> do	

β, δ, γ (以下 Fr)

sá <u>β</u> e	ná <u>ḡ</u> da	só <u>γ</u> a
ál <u>β</u> a	a <u>ḡ</u> mirár	ál <u>γ</u> o
a <u>β</u> ríl	θju <u>ḡ</u> á <u>ḡ</u>	tí <u>γ</u> re
⋮	⋮	⋮

2.1 従来の分析

有声閉鎖音/摩擦音の分布について Harris (1969: 39) は次のように記している。

(2) b, d, g appears as continuant except initially and after homorganic noncontinuant sonorant

これまでの議論はすべて (2) が基本的に正しい一般化であるという前提に立つ。

2.1.1 Harris (1969)

Harris の擦音化規則 (3) は (4) の3規則をまとめて略記したものと考えられる。(注1)

- (3)
$$\left[\begin{array}{l} + \text{obstr} \\ - \text{tense} \end{array} \right] \rightarrow \left[\begin{array}{l} + \text{cont} \\ - \text{strid} \end{array} \right] / \left\{ \begin{array}{l} [+ \text{obstr}] \\ [+ \text{cont}] \\ \langle -\alpha \text{cor} \rangle \end{array} \right\} \left[\overline{\langle \alpha \text{cor} \rangle} \right]$$
- (4) a. St → Fr / [+obstr] —
 b. St → Fr / [+cont] —
 c. St → Fr / [-αcor] [$\overline{\alpha \text{cor}}$]

(4a) は障害音に先行された St を Fr に変える。[r̄][r] を含めた継続音の後に立つ St は(4b)で Fr になる。先行音の環境として残る鼻音・側音のうち、coronal の値が同じでないものの Fr 実現を規定するのが(4c)である。このルールは、彼自身が(2)として要約したように擦音化が同一調音位置の鼻音・側音を除いてどこにでも起こる一つのプロセスである事実を表現せず、3種の独立規則にそれぞれの存在理由のあることが証明されていない。

第2の問題点は素性 [coronal] の使用である。(3)で [coronal] が登場するのは [d] と [b, g] を+, -で都合よく分離するこの素性に便乗するためであって、擦音化現象が音声学的に coronal であるか否かに係わっているとは思われない。Spirantization を妨げているのは“同一調音位置”の先行鼻音・側音であるが、二価的素性の体系は「同部位」あるいは「異なる部位」をそのものずばりに表わすことができない欠陥を持つ。

Harris の定式化のもう一つの難点は、それが data の整理に終始して、St → Fr が一体どのような種類のプロセスなのか、何故指摘される環境で擦音化が生じるのかを説明していないことである。

2. 1. 2 Sánchez (1974)

擦音化を一種の同化規則として捉える Sánchez (1974: 83) の規則 (5) は前項で批判

- (5)
$$\left[\begin{array}{l} + \text{obs} \\ + \text{voiced} \end{array} \right] \rightarrow [+ \text{cont}] / \left[\begin{array}{l} + \text{cont} \\ \langle -\text{lateral} \rangle \end{array} \right] (\#) \left[\overline{\langle + \text{cor} \rangle} \right]$$

した欠陥をかなり改善している。(5)は障害音が継続音に先行される時、一様に続音化されることを明示しており、Fr が同化過程の結果生起すると説明できる。Sánchez はスペイン語の側音を [+cont] に解釈したので [l̄β][l̄r] の環境を [+cont] に含めて表わすことが可能になった。Harris は特にその理由を述べていないが [l̄] にマイナス値を指定したため(5)のような式が立てられなかったのである。側音は音韻規則の上で閉鎖音と同様な振舞いをすることもあり、また摩擦音・流音・母音と共に一つのクラスを形成することもあり、その調音様式の故に相反する二面的性格を同時にもつ。[continuant] に対し [l̄] を+に指定するか-にするかが各言語の音韻ルールを立てる上での都合にゆだねることで済ませれば、どちらかの特徴を無視してしまわなければならない、この素性そのものが問題を含んでいると言えよう。

(5)では ⟨-lateral⟩⟨+cor⟩ を強制共起させて * [l̄ð] の連続を阻止しているが、両素性がそれぞれの値でルールに述べられなければならない必然性はなく、例えば ⟨+lat⟩⟨-cor⟩ と変更しても同じ結果が得られる。Hammond (1976a: 43) はほぼ同じ内容の規則 (6) を示しているが、Harris と同じ ⟨-αcor⟩⟨αcor⟩ で * [l̄ð] を排除

- (6)
$$\left[\begin{array}{l} + \text{obs} \\ + \text{voice} \end{array} \right] \rightarrow [+ \text{cont}] / \left\{ \begin{array}{l} [+ \text{cont}] \\ \langle -\alpha \text{cor} \rangle \end{array} \right\} (\#) \left[\overline{\langle \alpha \text{cor} \rangle} \right]$$

する。この場合も $\langle \alpha \text{ cor} \rangle \langle -\alpha \text{ cor} \rangle$ としてもいい訳である。またスペイン語と平行した St/Fr の分布を見せるカタルニア語に対し Grau-Llobat (1976: 86) は $\langle +\text{lat} \rangle \langle +\text{distributed} \rangle$ を導入しているが [cf. (7)], これらの素性を各々マイナス指定に

$$(7) \left[\begin{array}{c} +\text{obst} \\ +\text{voice} \end{array} \right] \rightarrow [+cont] / \left[\begin{array}{c} +\text{cont} \\ \langle +\text{lat} \rangle \end{array} \right] \left[\langle +\text{dist} \rangle \right]$$

しても結果は変わらない。このように同じ data を扱うのに様々な規則の定式化が理論上許容され、有効な制限がないのは、上に指摘したように“同一調音器官”を直截に述べる手段がないことに起因している。

2. 1. 3 Cressey (1974, 1978)

この矛盾を回避するため Cressey (1974: 79) はいくつかの素性の束をカバーする記号として PA (Point/Place of Articulation の略と思われる) を提案して、St/Fr の変異を (8) で表わした。^(注2) 新たな Convention を設けることにより、この規則は Harris や Sánchez の式化でその不備が明らかになった同一調音点の表示に一応

$$(8) \left[\begin{array}{c} +\text{obstr} \\ -\text{tense} \end{array} \right] \rightarrow [-\alpha \text{ cont}] / \alpha \left\{ \left[\begin{array}{c} -\text{cont} \\ \beta_{PA} \end{array} \right] \right\} (\#) \left[\begin{array}{c} - \\ \beta_{PA} \end{array} \right]$$

成功している。しかし PA は調音位置を規定する独立の音韻素性ではなく、規約 (9) で読み換えられる便宜の方策であり、実質は high, back, anterior, coronal,

$$(9) \dots\dots \text{where } X \alpha \text{PAY is a rule, } \alpha \text{ PA in} \\ X \alpha \text{PAY is replaced by } \left[\begin{array}{l} \alpha \text{ high} \\ \beta \text{ back} \\ \gamma \text{ anterior} \\ \delta \text{ coronal} \\ \epsilon \text{ distributed} \end{array} \right]$$

distributed の5種の二価素性に言及している。鼻音同化を始めとする調音点同化現象は自然な音韻プロセスでありながら、SPEの素性体系では表記に不相応な複雑性が避けられない矛盾は以前から指摘されている。スペイン語擦音化も同一調音位置に触れなければならないが、しかしルールが複雑になり過ぎると同じ dilemma に陥っていた。

もし調音位置が音声通路に沿って一定値を段階的に取る多価的素性であるならば、“homorganic” は2ヶの segment を例えば [n PLACE] と表記することで、事実即して簡明に示すことが可能になるであろう。拙稿は Cressey (1974) のような彌縫的解決ではなく、欠陥の根源は素性の二価性にあるという認識に立ち、音韻論の素性は分離量化された多価(多値)指定を許すものであるという主張に与みし、その素性体系の概略を §4 で示す。

3 過程の方向性/無方向性

さて、St/Fr の現われは生成音韻論で一般に行なわれて来たように摩擦化として捉えるのが妥当かどうか見て置く必要がある。他に少なくとも2通りの分析法が可能であるからである。一つは擦音化の逆の方式、つまり Fr を St 化するルールを仮定する方法である。もう一つは Fr か St かに関して中立な、いわゆる archi-segment に対して各々の環境で双方を完全指定分節音に変えるやり方である。

3.1 Spirantization

基底 segment として St を認め、環境 X __ Y で摩擦音化が起きるとする Harris (1969) に代表される見方である。阻害音の中で Fr より St の方が無標で多数の言語に

$$(10) \quad \begin{pmatrix} b \\ d \\ g \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} \beta \\ \delta \\ r \end{pmatrix} / X _ Y$$

広く分布する segment である事実やスペイン語の基底音目録における均斉の観点、あるいは通時的に存在する子音弱化の傾向 etc. から支持され、多くの分析者によって殆ど格別な論拠を示さず採用されている。

3.2 Despirantization (Stop Formation)

同一部位の鼻音・側音の後で Fr を St に変える非摩擦音化（閉鎖音化）process (11)

$$(11) \quad \begin{pmatrix} \beta \\ \delta \\ r \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} b \\ d \\ g \end{pmatrix} \quad W _ Z$$

を想定するこの方式にも有利な側面がある。まず Fr の方が St に比べ出現頻度が遙かに高い。Cuba 及び Miami-Cuban スペイン語の速い発話では全環境で Fr が現われる他、Puerto Rico, Dominica 等においても W-Z で Fr が実現され (Hammond 1976 b), これらカリブ地域方言では一層 Fr の優勢が目立っている。また規則の簡潔さを至上命令とするならば (10) よりも (11) が望ましい。なぜなら摩擦音化の環境は、実は、“（閉鎖音化の環境）W __ Z を除いて” に相当するからである。

閉鎖音形成プロセスを支持するもう一つの証拠として Lozano (1978: 498) は硬口蓋・軟口蓋摩擦音の破擦音（閉鎖音）化、i. e. [j̥] → [j], [w̥] → [ᶯ] を考慮している。(12) の hielo, hueso, huevo に対し elo, oso, obo を基底形とする Harris

$$(12) \quad \begin{array}{lll} \text{a.} & [j̥] & [j] \\ & \text{konjé'elo} & \text{jé'elo} \quad (\text{hielo}) \\ & \text{eljé'elo} & \text{dejé'elo} \\ \text{b.} & [ᶯ] & [w̥] \\ & \text{u7ᶯwés'o} & \text{wés'o} \quad (\text{hueso}) \\ & \text{ko7ᶯwé'βos} & \text{wé'βos} \quad (\text{huevos}) \end{array}$$

風音韻論では変化の方向は紛れもなく非摩擦音化であり、逆ではない。そしてその環境は、W __ Z とほぼ一致する。しかし (12) のデータは、St を基本的なもののみなし、それを(8)に類する規則で摩擦化すると共に、同じルールで以て逆方向に [j, ᶯ] を導出できる。Cressey (1978: 70-3, 1979: 124-5) の双方向的 (bidirectional) アプローチはこの線に沿っている。

3.3 Archi-segments /B, D, G/

基底分節音における [cont] を無指定にしておき、St / Fr をそれぞれの環境で規定しようとする (13) は各音素の異音分布を一括して平面的に述べるのと平行している。具体的

$$(13) \quad \text{a.} \quad \begin{pmatrix} /B/ \\ /D/ \\ /G/ \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} b \\ d \\ g \end{pmatrix} / W _ Z$$

$$b. \begin{bmatrix} / & B & / \\ / & D & / \\ / & G & / \end{bmatrix} \rightarrow \begin{bmatrix} \beta \\ \delta \\ r \end{bmatrix} / X _ Y$$

には Lozano (1979 : 104) で提案されている規則 (14) はこの機能をもつ。

$$(14) \begin{bmatrix} + \text{obst} \\ + \text{voice} \end{bmatrix} \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} [-\text{cont}] / \left\{ \begin{array}{l} \parallel \overline{[-\text{round}]} \\ \left[\begin{array}{l} -\text{obst} \\ -\text{cont} \\ \alpha \text{ point art} \end{array} \right] \end{array} \right. \\ [+ \text{cont}] \end{array} \right\} \left(\# \right) \overline{[\alpha \text{ point art}]} \end{bmatrix}$$

3.4 Variant の格差と可変性

スペイン語の St/Fr は相補的に分布すると一般に言われているが、両者の分布域は完全に排他的な、つまり対等の安定した関係にあるのかどうか再検討してみる価値があるのではないかと思われる。W_Z の環境で Fr を調音することはかなり困難で、相当意図的な努力を払わねばならず、従って自然な発音では生じ難い。一方 X_Y において St を実現するのは多少不自然ではあるが容易であり、実際に音節の区切りを明確にした丁寧な発音様式で、特に語頭では、しばしば観察される。換言すれば、全環境で St はあり得るが W_Z 以外では先行音に同化されて擦音化されると述べるのができるのに対し、どんな環境でも Fr が発現し得るが W_Z では St になると記述するのは無理であることがわかる。この事は、stop/spirant の対立が互角一定でなく、可変的で、前者の方が優位にあって、より基本的な実在として意識されていることを示唆する。2つ以上の音韻的 variant の間で、一方が他方に交替できるのに反対方向の代替が不可能であるか極めて困難な場合、方向性をもった一つのプロセスで規定されるべきだと考える。それ故、St, Fr を同等視する § 3.3 の不完全指定方式や、閉鎖音化を主張する § 3.2 よりも Spirantization (10) の方がスペイン語の実態を適格に表現しているとみなせる。Despirantization 説の論拠の一つとなっている Fr の出現頻度の高さは St/Fr 変異におけるプロセスの作用域の広がりを示しているのであって、その方向性と直接関係がない。だから、頻度の大きい variant が常により基本的であるという主張は受け入れ難い。

3.5 [ɟ, ɣ^w] vs [j, ʝ]

次に (12) のデータにみられる [ɟ, ɣ^w] / [j, ʝ] と St/Fr を同じ一つのプロセスと見なければならぬ (cf. Lozano 1979 : 35, Cressey 1979 : 123) かという問題であるが、両者は共通項で結ばれてはいるが同一規則として表現される等質的現象でないとするのが筆者の見解である。[j] の破擦音化が n, l 後の位置で義務的なのは paradigmatic に対比される [nɟ, ɣ], [lj, ʝ] との差異を拡大し、知覚上の識別を容易にし

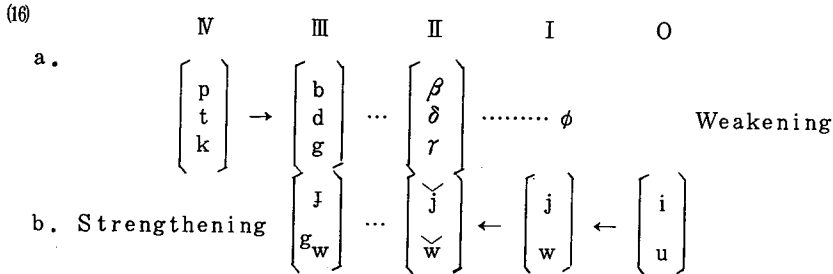
$$(15) \begin{array}{l} n \$ \mathcal{J} \leftarrow n \$ \check{j} : n j : \mathcal{J} \\ l \$ \mathcal{J} \leftarrow l \$ \check{j} : l j : \lambda \end{array}$$

ようとし、絶対冒頭での [j] ~ [ɟ] が任意的であるのはそのような必要性がないためであると考えられる。(12 b) の [ɣ^w] ~ [ʝ] 交替も詳しく見ると St/Fr の場合と異なっていることに気づく。後者の variant 分布が音声的環境で規定されるのに対し、前者の [ɣ^w]

は [w] ~ [w̃] 変異の延長上に、形態素境界に条件づけられた母音間にも出現することがある: p. ej. a+huec+ar [awekár / a^{w̃}ekár / a^gwekár]。また [ɟ] と似て、休止後で [g^w] は義務的でなく [w̃] と代り得る。

3.6 双向性と音配列制約

(12) の非摩擦音化と摩擦音化 St → Fr は相反する二つの方向を持つが、環境 W_LZ で交差し互に重なり合っているために、一見、同じ現象として一般化され易い。共時体系に認められる音韻過程が、通時的にその言語の音韻を支配する大きな流れの方向を惰力として維持すると見るのは突飛な妄見であろうか。この考え方が許されるならば、有声閉鎖音の摩擦音化は無声閉鎖音から有声閉鎖音への Lenition の延長線上にある弱化プロセスの一部として位置づけることができる。(注3) 他方、有声摩擦音 [ɟ, w̃] の非摩擦音化は、母音 → Glide → 摩擦音 → 閉鎖(破擦)音という、“より子音的”な音をめざす一連の強化過程と関連づけるべきであろう。図式 (16) で、II → III, III → II の移行は進取先行的方言(個人語)で



はほぼ完全に達成されている。しかし多くの方言で同一調音位先行子音が閉鎖を含む場合、つまり典型的な“強い位置”でのみ弱化は禁止され、強化は義務的であり、階程移行は部分的に止まっている。相対的に“強い位置”である休止後、語頭、(子音後)音節頭位における閉鎖か非閉鎖かは (16 a, b) の間に、また各音間に差異があつて可変的条件に従うが、弱化は抑制され、強化は促進される傾向を持つ。すなわち、閉鎖音弱化と摩擦音強化は各々反対方向のプロセスである事実と、両過程とも同一調音位置の閉鎖音-摩擦音連続を認めないという(無方向性の)音配列制約の存在を分離して考えるべきであろう。

それ故、(16 a, b) を同一ルールとして単純に折り畳むことには賛成できない。弱化過程は現代スペイン語の各方言で顕著であり、casual speech において Fr のわたり音化(音節末位)、完全な消失(語尾、音節末位、母音間)にまで到るケースがしばしば見られるのは、(16 a) の方向性を認めれば自然に説明されるであろう。

3.7 Lozano の相補的規則

Lozano (1978, 1979) はスペイン語に Stop - formation と Spirantization の二つの相補的規則(process)が存在し、それが式 (14) で表わされるかのように考えている。しかし彼女の閉鎖音形成は (13 a) であり、小論の意味する (11) (16 b, II → III) でないし又、Lozano の摩擦音化は (13 b) で、ここで意図するような St → Fr ではない。彼女の規則 (14) は、結局、余剰的(or 非示差的)特徴を不完全指定 segment に相補的に与える手順を示しているものであり、ある(具体的に発現し得る)音声を他の(具体的)音声に結びつける音韻プロセスを表現していない点に注意しなければならない。

4 多価的素性

どのような音韻素性が多価的であるべきか、どれだけの種類のいかなる素性が設定されるべきかについては未だ十分掘り下げた研究がなされていないように思われる。ここでは当面のスペイン語の主な現象を見るのに不可欠な約 10 素性を試行的に利用する。それらの大半は Williamson (1977), Ladefoged (1971, 1975) で提案されたものを採用している。名称、値の指定、式型などにはかなり大幅な変更を加えているが、その理由や細かな問題点の検討は紙幅の都合で省略する。

4.1 [STRICTURE]

主要音類を区別する最も重要な素性が「せばめ」[STR(ICTURE)] で、音声通路がどの程度の狭窄閉鎖を受けて呼気の流れが妨害・阻止されるかを段階的に示す。中間点を挟んだ 2 けたの数字は連続調音を指し、破擦音は 2・1 と表記される。また同時調音は斜線を用

[2 STR]	Stop
1	Fricative
0	Approximant
- 1	High vowel
- 2	Non-high vowel
2・1	Affricate
2/0	Nasal, Liquid

いて示し、鼻音・流音は [2/0 STR] となる。母音、母音+わたり音、阻害音、自鳴音、子音等の natural class はある整数と等・不等号で結ばれる集合でもって表わされる。

[≤ - 1 STR]	Vowel
≤ 0	Vowel, Glide
≥ * 1	Obstruent
≤ * 0	Sonorant
≥ 1 *	Consonant

なお、数字の左右に付く asterisk は同時（又は連続）調音における、それぞれ右、左側に表記される [せばめ] をも含むことを意味する。例えば 2/1 は $\geq * 1$ のメンバーであり、 $2/0 \in \{\leq * 0\}$, $2/0 \in \{\geq 1 * \}$, $2/1 \in \{2 * \}$ etc. を含意する。

4.2 [PLACE]

素性 [位置] は構音器官のどの場所で主要な狭めが生じるかを、最も前寄りの上唇から声門に至るまで順次的な整数値をとる単一素性である。

[6 PLACE]	upper lip	0	(central vowel)
5	upper teeth	-1	velum
4	behind upper teeth	-2	uvular area
3	alveolar ridge	-3	backwall of pharinx
2	behind alveolar ridge	-4	glottis
1	palate		

4.3 その他の素性

[1 APICAL]	lamina	[1 VIBRATION]	trill
0	apex	0	normal consonant
-1	retroflex	-1	tap
[1 VOICE]	voiced	[1 NASAL]	nasal
0	unvoiced	0	oral
[1 LATERAL]	lateral	[1 LABIAL]	labial
0	non-lateral	0	non-labial

Vowel features :

[HIGH] 1, 2, 3, 4

[FRONT] 1, 0, -1

[ROUND] 1, 0

上記の素性のうち〔VIBRATION〕は調音器官が顫動を許す程、緩やかに保たれているかどうかの程度を表わし、弾音が-1を指定される他、一般子音は0値と仮定する。

5 スペイン語擦音化

以上からスペイン語の St → Fr は一種の狭め同化過程として次のように式化できる。こ

(17) Stricture Assimilation

$$\left[\begin{array}{c} 2 \text{ STR} \\ 1 \text{ VOICE} \end{array} \right] \rightarrow [1 \text{ STR}] / [\leq *1 \text{ STR}] \text{-----}$$

の式では2の値の〔せばめ〕を持つ segment が先行する1以下の〔せばめ〕の音に同化されて、一段階小さい狭めの摩擦音になる事実が明示的に述べられる。また小さい狭めへの順行同化として捉えたため、Cressey (1974, 1978)のルールのような pause (音声句境界) [||]に言及する必要がないのも (17)の特色である。スペイン語には同一調音位置の閉鎖(を含む)音・摩擦音連続を忌避する制約 (18)が存在し、* [nδ, lδ, mβ, nr] は block される。(注4)

(18) Homorganic Constraint (negative)

$$X \left[\begin{array}{c} 2 * \text{ STR} \\ n \text{ PLACE} \end{array} \right] \$ \left[\begin{array}{c} 1 \text{ STR} \\ 1 \text{ VOICE} \\ n \text{ PLACE} \end{array} \right] Y$$

6 多価的素性による若干のプロセス

前掲の多価素性を用いてスペイン語音韻論の中で特に目立つ若干の現象を例示的に定式化してみる。これらは Stampe (1972)の自然音韻論流に分類すれば“規則”ではなく、すべて“process”に属するものであるが、入力に現われる分節音は注意深い遅いテンポの発音に普通にあるいは意識的に調音可能な具体的音形を想定している。式の出力は速度の速い会話または飾り気のない日常発音 etc. で自然に実現される音声表示である。従って、各

過程の適用はそれぞれ可変的環境により確率は異なるが、原則としてすべて optional である。(18) のような音配列制約や分節音のマトリックス構成に関する制約は音韻過程に対し最終出力条件として連結され、前者に違反するような segment (の集合) は、もし feeding 関係にある他のプロセスが存在しなければ、生み出されないものと仮定する。

6.1 Glide Formation

$$(19) \quad [-1 \text{ STR}] \rightarrow [0 \text{ STR}] / \left\{ \begin{array}{l} \text{---} [-2 \text{ STR}] \\ [-2 \text{ STR}] \text{---} \end{array} \right\}$$

6.2 Initial Strengthening

$$(20) \quad [0 \text{ STR}] \rightarrow [1 \text{ STR}] / \$ \text{---}$$

$$(21) \quad \left[\begin{array}{l} 1 \text{ STR} \\ 1 \text{ VOICE} \end{array} \right] \rightarrow [2(\cdot 1) \text{ STR}] \quad \text{under certain conditions}$$

わたり音形成 (19)、頭音強化 (20) (21) はいずれも狭めを一階程高めており、母音→接近音→摩擦音→破擦(閉鎖)音が「狭め強化」という同じ性質をもった連続的プロセスであることがわかる。[\check{y} , \check{w}] のうち同位制約 (18) に触れるものは義務的に (21) を適用される。

5.3 Final Weakening

$$(22) \quad [2 \text{ STR}] \rightarrow \left[\begin{array}{l} 1 \text{ STR} \\ 1 \text{ VOICE} \end{array} \right] / \text{---} (\text{C}) \$$$

音節末の弱い位置では尾音弱化が見られ、閉鎖音をより[せばめ]の小さい i. e. 開いた segment にする。これはスペイン語に支配的な開音節化傾向に共謀する現象であるとみなされる。

6.4 Nasal & Lateral Assimilation

$$(23) \quad \left[\begin{array}{l} 2/0 \text{ STR} \\ 0 \text{ VIBRATION} \end{array} \right] \rightarrow [n \text{ PLACE}] / \text{---} \$ [n \text{ PLACE}]$$

Harris (1969: 19-20) が懸案のまま残した鼻音及び側音の同化は上のように一つの過程として纏められるべきだろう。(23)で素性[顫動]が言及されているのは[-1 VIBR]の弾き音[r]と[1 VIBR]の[r̄]を除く働きをするだけでなく、調音保持力の極めて弱い弾音や逆に目立って強い顫動音が同化を蒙らないことを明示している点で有意義であると考えられる。n 値の変域は側音と鼻音で異なるが、それらは各 segment の構成素性に対する制約として別個に存在するので (23) に述べられる必要はない (Cf. Cressey 1978: 66-7)。

6.5 Voice Assimilation

$$(24) \quad [\geq 1 \text{ STR}] \rightarrow [n \text{ VOICE}] / \text{---} \$ [n \text{ VOICE}]$$

音節末子音は後続子音の有声・無声に同化され得る。[声]特徴は1, 0の二価としたが、他言語の資料を考慮すれば、少なくとも声門閉鎖-有声-囁き-無声を弁別できるような多価素性でならないと推定される。なお、スペイン語に特徴的な半(弱)有声化は、声門の形状で規定される差異なのか、狭めの解放と声帯振動開始時間との Timing が絡んでいるのか詳らかでないが、これらの微差は Detail Rule 内での scale に適正な位置づけがなされればよいと思われる。(注5)

(August 31. 1979)

*本稿は日本ロマンス語学会第15回大会(1979.5.19 於京都外大)で筆者が口頭発表した「多価の素性でみたスペイン語音韻論の若干の規則」の一部を加筆・修正したものである。

[注]

1. Lozano (1978:499 fn.)でも触れられているが、(3)の展開の可能性として、Harrisの意図しなかった無環境で一律に擦音化を起こす部分規則(i)を含むとも解釈される。山括

$$(i) \left[\begin{array}{c} + \text{ obstr} \\ - \text{ tense} \end{array} \right] \rightarrow \left[\begin{array}{c} + \text{ cont} \\ - \text{ strid} \end{array} \right] / \text{_____}$$

弧 < > 使用についての問題点は Lozano (1979:8-10)でも指摘されている。

2. Cressey (1978:78) では素性が一部変更され下記のルールとなるが趣旨は同じである。

$$\left[\begin{array}{c} - \text{ son} \\ - \text{ tns} \end{array} \right] \rightarrow [\alpha \text{ ocl}] / \alpha \left\{ \begin{array}{c} \parallel \\ \left[\begin{array}{c} + \text{ ocl} \\ \beta \text{ PA} \end{array} \right] \end{array} \right\} \left[\frac{\quad}{\beta \text{ PA}} \right]$$

3. [b] ~ [β] の中には [w] → [w̃] → [v] / [β] の強化を経て来たものも含まれるようであるが、全体として St → Fr の史的推移を否定する程のものではない。

4. 同位制約(19)は『音節境界の前後の同位 segment において、後者は前者(の含む最大の)強度と同等かそれ以上の強度を持たねばならない』という更に一般的な条件の一部である。“強度”は [STR] と [VIBR] の両値の相対的大小を意味している。*[sr, nr, lr] (cf, [nr̄, sr̄, lr̄]) もこれによって規制される。

5. 最も低いレベルの音声表示で多価の実質は無限分割可能性をもつ連続量であり、異言語間の同種 segments の比較が可能である。一方、音韻素性に付せられる係数は分離的 (discrete) な整数で、その値は素性の外延と対立項数から決定される。

REFERENCES

- Chomsky, Noam and Morris Halle (1968). *The Sound Pattern of English*. MIT Press
- Cressey, William W. (1974). *Homorganic in generative phonology*. -*Papers in Linguistics* 7, 69-82
- _____ (1978). *Spanish phonology and morphology: A generative view*. Georgetown University Press
- _____ (1979). *Bidirectional rules: Another case from Spanish*. -*Georgetown University Papers on Language and Linguistics* 15, 123-6
- Grau-Llobat, Manuel (1976). *Some problems in Catalan phonology*. Ph.D. dissertation, Cornell University
- Hammond, Robert M. (1976). *Phonemic restructuring of voiced obstruents in Miami-Cuban Spanish*. -1975 *Colloquium on Hispanic Linguistics*, 42-51
- _____ (1976b). *Some theoretical implications from*

- rapid speech phenomena in Miami-Cuban Spanish.
 Ph.D. dissertation, The University of Florida
- Harris, James W. (1969). Spanish phonology. MIT Press
- Ladefoged, Peter (1971). Preliminaries to linguistic phonetics.
 The University of Chicago Press
- _____ (1975). A course in phonetics. Harcourt Brace
 Jovanovich, Inc.
- Lozano, Carmen M. (1978). An argument for partial specification.
 Evidence from Spanish. -The Fourth LACUS Forum 1977.,
 491-501
- _____ (1979). Stop and spirant alternations: Fortition
 and Spirantization in Spanish phonology. Ph.D. dissertation,
 Ohio State University. Reproduced by the IULC
- Montes Geraldo, José Joaquín (1975). Breves notas de fonética actual
 del español. -Thesaurus 30, 338-9
- Postal, Paul (1968). Aspects of phonological theory. Harper and Row
- Sánchez, Rosaura Arteaga (1974). A generative study of the two
 Spanish dialects. Ph.D. dissertation, The University of Texas
 at Austin.
- Stampe, David (1972). A dissertation on natural phonology. Ph.D.
 dissertation, University of Chicago
- Williamson, Kay (1977). Multivalued features for consonants. -Language
 53, 843-871